研究

魅せられて綴る文学（十）

藩学「四教堂」と先哲

勝間田　三千夫
（会員　佐伯市中村北町二―九）

六日間滞在後十一月一日早朝日田へ出発、起伏連互する諸山の谷間を往き黒川に一泊、翌日井出口に一泊、三日夕刻豊後日田隅町に着いた。この道中に、景観を賛えて三首の詩を賦した。（略）

山陽遊歴の今一つの目的は、広瀬淡窓を訪ねることであった。十一月三日夕刻着いた隈町は三隈川の辺り、小高い丘を亀山の城と稱し、かつて毛利高政侯（後佐伯藩主）の居城で知られた町であった。加島富上の紹介で森五石宅に入る

十一月　四日　咸宜の都講中島米華、淡窓の命により名代として来訪。

八日　夕刻日田に入り淡窓（三十七歳）を訪ふ。その夜は淡窓の伯父平八宅（秋風庵）に一泊。

九日　淡窓秋風庵に来り訪。

日　隅町より三たび熊本へと筑後川を下る。

この日の事は淡窓日記にはない。

二十五日　（冬至）隅町に帰着、中島米華また淡窓に代って挨拶に来る。

二十六日　夜館林萬里用伴淡窓を訪ひ、課題の詩席に列す。

この課題の詩席については後に述べる。

十二月　三日　淡窓、米華を伴い来訪。

四日　告別の為淡窓を訪ひ一宿。

五日　日田を発し耶馬渓に向う。森實村に一泊。

六日　正行寺雲華と会す。三日間滞在。

九日　耶馬渓探勝五日間。

この時、山国川が山陽の手で始めて「耶馬渓」と書かれた。

十六日　正行寺を辞す。中津へ向ふ。

日　大里より船で下関に向ふ。（山陽全書及年譜より）

以上、文政元年山陽西遊の旅を概略してみた。山陽については、世に名高き人だけに読者の教養に委ねることとするが、一年に一月を缺く九州遊歴による収穫は、山陽に大きなものをもたらした。旅行は活学問であると、好んで旅行した心情に、見聞脳裡に銘じて忘れず、心感これを書して残す山陽の姿勢をみることができる。この中に「西遊の三絶」中でも天下一品と称えて、山水は耶馬渓と天下に紹介されたことであり、今一つは、人に中島子玉を得たり。と、この子玉は、山陽が後に標的視せざるをえない人物、となるのである。

また、この記述の中に米華とあるが、これは子玉のことであって、咸宜園就学中には米華の号はなかったことを付記しておいて、以下淡窓日記を中心に進めることとする。

十一月　三日　聞頼徳太郎到隈町。

頼徳太郎とは書簡の上での交わりは深いが、遠遊叶わぬ淡窓にとって、一度は会したい人であった。徳太郎は安芸の人で頼春水の子、名は襄、字は子成、山陽と号す。時に三十九歳、才力は遠く父の上にあり、其名は海内に聞えていた。

十一月　四日　使益多到頼徳太郎館伸辭（辞）。休禮記講及素讀。

淡窓病のため出迎えできず、益多を名代として隈町旅宿に頼徳太郎を訪ねさせ、旅の労いと歓迎の言葉を述べさせた。

八日　日夕舘林清記導頼徳太郎来訪。供酒及飯。伯父丸屋幸右衛門亦來談。到夜半而散。徳太郎宿秋風菴。休蘇詩講。

暮どき舘林清記、頼徳太郎を導き来見した。酒飯を供

にしながら、諸々話は弾んで夜半に到った。徳太郎はこの夜秋風菴に宿した。徳太郎とは二歳下（三十七歳）の淡窓は、初めての会見であった。壁辺山間の地にある教聖淡窓の目に、徳太郎がどのように写ったであろうか。ともあれ話中上方の新風を聞き洩らす筈はなかった。

九日　訪頼徳太郎於秋風菴。日夕歸隈町。

二十五日　（冬至）聞頼徳太郎再來隈町。使益多往問之。

この日、肥後より頼徳太郎隈町に再来したと聞き、益多代って訪ねた。頼山陽全書には「冬至隈町着。米華、また淡窓に代って挨拶に來る。」とあり、隈町を基点に幾度か熊本を往来している。「隈町より、三たび熊本へ引返すべく、筑後河を下る。文政之元十一月「下筑後河」の七古あり。と、

また、熊本へ入て村井家を訪ね、琴山遺愛の如泰畫幅を所望したが、古香はそれを諾せず徒労に過ぎなかった。また、薩摩屋にて古香に別れ、隈町へ引返す。とか、久留米に入り藩儒樺島石梁（六十五歳）を訪ふ。と、

二十六日　夜頼徳太郎同舘林清記來訪。課題賦詩。既而伯父。酢屋清太郎。丸屋幸右衛門亦來。供蕎麥及飯。至五更而散。

頼山陽全書にはこの日の事を「夜、萬里同伴、淡窓を訪ふ。課題の詩席に列し、淡窓伯父酢屋清太郎、幸右衛門同席、蕎麥を供せされ、曉近く散會。」と、

十二月　三日　携益多之隈町。舘頼徳太郎。移時而歸。

頼山陽全書には「淡窓、米華を伴ひ來訪。」とあり、また、隈町を去るに臨み、森家の僕清兵衛に書一幅を與ふ。」と、文化十四年の作書一幅、近作を録して与えている。

四日　頼徳太郎將東歸。夜訪予家告別。且宿焉。舘林清記。鍋屋成策。京屋四郎兵衛。鍋屋文兵衛來送。兒玉成亦偶至。飲酌閑談到五更。諸人先後歸家。唯清記同徳太郎止宿。夜觀徳太

郎所藏屠隆書。肅雲從品寛成畫。

頼山陽全書は「告別の為、淡窓を訪ひ一宿。萬里を始め、森仁里・荊田・來會。携帯の屠隆書・肅尺木及び品寛成畫などを展覧に供し、萬里と共に一宿。」とある。淡窓家では、頼山陽東帰告別の酒席が暁近くまでつづいた。

五日　舘林清記歸家。朝飯畢。頼徳太郎送。予同益多。鍋屋成策送之。至河原町。予先別。二子更送十餘町而歸。予歸路過酢屋勘助。留供午飯。移時而去。過魚町乃歸。

朝食をすませ、頼徳太郎は出発した。淡窓は益多・鍋屋成策と河原町まで送って、二子更に十餘町見送って帰った。淡窓は「徳太郎は名家の子にして、誉れ海内に聞ゆ、その西遊に、人々風采を相望す。今これを見るに及ぶ、実に才子の名虚しからざるなり。」と、

ここ前後三十日、両儒互いに往来し、淡窓の目に写った山陽観を次のように言っている。

「徳太郎は、當世の名家において第一流なり。余暇中のしる所、此人より才あるはなし。唯其人となり、簡傲にして禮なく、又利を貧る、是を以て至る所人に悪まれ、往々に其の地を遂ひうたれり、惜しいかな」

と見ている。思想「敬天」を重んずる淡窓には、当然の観かたであったろう。

（二）益多頼山陽との出会い

文政元年十一月三日、山陽は隈町に、六十四国に名声ある広瀬淡窓を訪ねた。この日淡窓は発熱悪寒極めて甚く、夜医者を招いて薬を服す状態で、頼徳太郎の迎えはできなかった。翌四日、益多淡窓の名代として、隈町の旅宿に徳太郎を訪ねて旅の労を謝す。

八日に至って淡窓の病も平癒し、この日館林清記、安芸の儒生頼徳太郎を導き来訪があった。

二人は文通では十年来の知己であるが、初めての会見であった。淡窓は大いに歓迎し、中島益多を接待役にして酒飯を供した。

この頃益多は十八歳になったばかりであったが、既に咸宜園の学生から都講（校長）に昇格していて、通稱子玉と呼ばれていた。

山陽の接待役を仰せつかった子玉だが、簡傲な山陽は、

この若輩者といわんばかりにあしらって、相手にしなかった。と、三十九歳の大詩人、大儒学者で天下に轟く文豪だけに、子玉が子供にしか見えなかったであろう、一言も交わってくれなかったという。

林外子玉傳に曰く

「頼子成西遊シ來リテ先生ヲ訪フ。先生子玉ヲ呼ンデ之ニ陪セシム。子成人ト爲リ簡傲。子玉時ニ年十八。子成童子ヲ以テ之ヲ待チ、一言ヲ交ヘス。」と

ともあれ、今夕は淡窓の伯父月化翁、丸屋幸右衛門と共に交わりを深くし、夜半に至って散会となり、山陽は秋風菴に宿した。

明けて九日淡窓は、咸宜園の向い道一つへだてた秋風菴に山陽を訪ね、互いに詩作し、日暮れに及ぶまで山陽の旅の話を聞きながら、言下に筆をはしらせ、山陽に贈る七言古詩をつくった。流石名流相会し、酒席に即興して詩の競作はつきることを知らなかった。

これに拍車をかけるがごとく、撃柝一声熟生達の「休道の詩」の朗々とした吟流が、雪に垂れる柴垣を距てて、寒夜のしじまに余韻嫋嫋として流れていた。山陽はやわら筆をとって「広瀬廉卿を訪う」と題して七言律詩をつくった。

琅々たる咿唔柴関より出て、村熟新たに開く松柏の間。
斗折蛇行筑水に臨み、竹批馬耳豊山を見る。
羨む君自首此中に住むを、愧づ我れ青鞋何の日か閑かならん。
且つ喜ぶ一樽醒醉を與にし、細かに詩律を論じて互に相刪するを。

と、日田盆地の風景と、子弟教育を楽しむ淡窓を、羨む気持が伺える。

山陽はこの滞在中に数多の詩をつくっている。機会を得ては肥後筑後川の間を往来し、名詩を作ったのもその一つである。

二十五日、山陽肥後より再び隈町に来訪、淡窓は子玉を名代として挨拶させた。

明けて二十六日は、熟生七十三人の月旦改めの日である。この日夜に入って、山陽が館林万里を同伴してやってきた。淡窓は中島子玉を呼んで四人対座で、題を課して詩を競作することにした。場所は堀田町秋風菴の一室、

課題は「加藤公の廟に謁す」とし、競作詩は時間を限って行うものであるから、その時間は線香一本を限りとして行うこととした。

この詩会の模様については資料不足のため、中島市三郎著「詩人淡窓」より引用する。

淡窓の伯父酢屋清太郎、幸右衛門（淡窓日記、山陽全書）の列席の中とあるが、中島氏は、月化（伯父）、富永、千原三人が陪席している。

さて、陪席者の見守る中、競作詩会合図の線香一本に火が點いた。山陽、淡窓、万里、子玉の目の輝きが変った。陪席者は勝負如何にとかたずをのんだ。沈思黙考、寂として声なく、主意充分定ったと見え、各自矢立の筆が紙面を走りはじめたと見るやいなや、天下の頼山陽の眼光が、一閃ピカリと鋭く光った。細かな文字で早走書がはじまり、先ず前書き文章を書いた。未だかつて見たことのない、真剣勝負である。淡窓以下必死の制作中に、山陽の筆がピタリととまった。見事な達筆に、七言律詩三十六文字の詩であった。

淡窓は、線香の火がもえ尽す寸前まで、黙々として推敲に推考を重ねて筆を置いた。七言絶句二十八字の詩であった。量でこそ山陽に劣るが、作品は、石と玉ほどの差がある堂々とした詩であったといわれている。

詩会は五更に至って散会した。

なおこの詩会で、山陽が書いた前書きの作品は、そのまま篇額となって、咸宜園に残っている。

戊寅十一月廿六日夜、咸宜園を過ぎ、廉卿（淡窓）万里、子玉諸子と与に同じく此詩を賦す。余の韻偶々万里と同じ。必ずや雷同する者あらん。乃ち疾く書して相似す。巧拙・穏いなは姑らく恤うに遑まあらざるなり。襄（山陽）

とある。

同題の詩「加藤公の廟に謁す」二首のうち各一首を示すと

先ず山陽の作

鉄槍陥陣馳駆を効し、阿虎爭獰万夫に敵す。
苦戦辺風曾て指を堕し、凱旋朔雪尚鬚を吹く。
經営遺愛千乗の國。顧望関心六尺の孤。
枉道夜叉また佛に類し。豊碑字字歸俘を頌す。

この詩は「頼山陽先生全書」の詩集にある。

次に淡窓の七言絶句の作をみると、

寸木支え難し大廈の頽するを。　寸木難支大廈頽
丹心死に抵レドモ未だ嘗を灰せず。　丹心抵死未嘗灰
遺孤託すべし眞の君子。　遺孤可託眞君子
風に曾參一語を誦し來る。　風誦曾參一語來

と、後に篠崎小竹これを評して曰く「出雲の人が加藤公の讀む所の論語を蔵すると聞くが、作者は知るや否や」と、

またこの詩は、陸軍士官学校の詩吟教科書に採用され、明治、大正、昭和の青年将校たちに朝夕愛吟せられ、その烈々たる軍人精神を、いやが上にも高潔崇高ならしめたという。かくして山陽は、日田数十日の滞在によって、幾多の詩をつくった。十二月三日、山陽が熊本より隅町に返るを聞き、益多を携えて往きて訪ねたところ、隅町を去って東帰するというのである。十二月四日夜になって、山陽が告別の挨拶に咸宜園を訪ねた。淡窓は、書斎遠思樓に招き、詩酒の交わりをした。此の時両個に詩があるが（省略）、互いに人格を知り、尊敬の念は深いものとなった。「儒林評」の中に、山陽について「予ガ眼中ニ見ル処、此人ヨリ才アルハナシト覺ユ（以下省略）。」と賞讃している。しかし、爾後両個は再び会することはなかったが、書簡の上に尚一層の親交があったことは確かである。さて、遠思樓の会飲も深更に及んだので、淡窓は山陽の疲労の状を見て、塾中第一の才子益多に命じて按摩をさせた。

益多は、山陽の肩を揉みつつ種々質問していた時、淡窓は益多の命じ、日頃作っている詩文集を、頼山陽先生に見て戴きなさい、またとない機会だから……と促した。益多は答えて即持参したのは、日頃の詩文集ではなく、山陽がこの度隅町に滞在した数十日間の、山陽について詠んだ詩文数章であった。

其生誦頼山陽詩。予且聞且寫之。未始擇其工拙也。
既而生笑曰。後数首即吾詩也。因作此詩。
洛陽文運日陵遲。稍喜山陽磊落辞。
聊且鼠鬚揮我筆。不妨狗尾續君詩。
月中桂光□何礎。夢裡看花趣更奇。
若問妍蚩相隔處。無鹽爭得併西施。

山陽はこれを一読するや、愕然として容を改めて「子ノ學才此ノ如ク透逸ナルヲ知ラザルハ予ノ不明デアル。」と激賞し、これより口を極めて子玉の名を称揚したのである。

またこのことについては、林外の子玉傳によっても明らかである。

「（略）先生（淡窓）子玉ヲ顧ミテ曰ク。子ノ所業ヲ以テ、覧ンコトヲ夫子ニ乞ヘト。子玉詩文數章ヲ録シテ之ヲ呈ス。子成之ヲ讀ミ愕然容ヲ改メテ曰ク、我殆ド子ヲ失セントセリト。此レヨリ極メテ之ヲ悠揚ス。……（略）。」（原漢文）と、

山陽は、この若き英才が大いに気に入り、この青年に注目して、以て自家将来の標的となすといった。

その四日の告別の会飲が五更に到ったのであるから、即ち翌五日の午前四時頃までということになる。山陽は朝食をとって出発した。淡窓は、益多・鍋屋成策と河原町まで送って別れたが、益多・鍋屋成策は、更に十餘町先まで送って別れた。

山陽の日田数十日の滞在は、咸宜園の塾生たちに大きな土産をもたらした。また益多には、この別れは再会を約束された別れでもあった。

山陽、子玉に告げて曰く、

「吾子ノ才澡マサニ今世ニ独歩スベシ、願ワクバ思ヲ古書ニ潜メヨ。」と、

山陽の学術また淵源あるを知る、と子玉はいっている。その後山陽から嘱望され、親交をつづけるうちに益多の心を動かすものがあった。「学問の仕上げには大都に出よ」と一大決心させたのである。

よってこれを縁故に、後京都に上り、山陽門下にその名を列するのである。（後述）

十二月　九日　曾艸堂。尋十月二十四日曾也。曾者。益多。兒玉茂。釋慈觀。玄海。蒲池久市。夜二更而散。是日文選輪講卒業。

十一日　使益多開戰國策輪講。

文政元年、師走の暦を余すところ淋しくなった。この冬も朝夕の冷え込みは変わらなかったが、雪は例年になく少なく、積雪を見たのは二十八日の大雪だけだった。この日、舉家大酒掃。晦日、塾生歳を守るもの七人、益多・宇次郎・無爲・屯・甚助・惠海・頴照は、朝食をすませた後、魚町及袋屋へゆき、この一年のお礼と慶びを申し述べて帰る。三更就寝。

（※以下次号へ）